

# 堰と橋の機能を併せ持つ石造構造物 かな ごうとう 金名の郷頭



■位置図



広島・岡山県境の備後灘に注ぎ込む芦田川は、福山市の水がめとして大きな役割を担っています。その芦田川の支川神谷川へ流入する溪流金名川に架かる石造橋が郷頭橋です。この橋には、天保11年(1840)、豪雨で上流の切池が決壊したときの大水をここでくいとめたとの伝承が残るように、砂防堰堤としての機能も併せ持っています。

堰の高さ7.8m、長さは最長部で8.7mの堰堤は上流に向って谷の兩岸に据え付けて支えるという、弓状に張り出した湾曲アーチ式構造のダムになっています。その石積みは、打ち込み接ぎ・谷積み技法、導水(トンネル)部は持ち送り技法が使われており、導水部の中央は幅1.9m、高さ1.2m、奥行き5.8mです。

周辺の地形は急峻で谷に落ち込んでおり、川底が侵食されれば橋そのものが崩壊の危機にさらされることになります。しかも川が急に流れを変える地点であることから、本体の強度を増大させるために、上流から下流まで栗石を敷き固めた上に直径30～60cm程の平石を敷いて川床にしています。高低差7.03mの自然石乱張りとは、トンネル部出口より下流方向に11.6mもあり、崩れやすい花崗岩の谷を護るための先人の知恵だといえます。

金名の郷頭は、明治39(1906)年、金丸一本山線の県道が開通した後も昭和30年代まで間道として徒歩通行者に利用されていました。地域で言い伝えられてきた「ごうとう」の呼び名に、村の入り口の意味「郷頭」の字が当てられていることもそれを表わしているような気がします。

金名の郷頭の工事年代を明らかにする文献は見つかっていませんが、石組みの状況からみて江戸時代中期のものと推定されており、アーチの治水ダムとして、近世の治水技術を示す構造物といえます。また、興味深いことに導水部は地区内に残る古墳の横穴式石室と同じ持ち送り技法が使われています。こうしたことも重なって、水害から地域を護って来た金名の郷頭は地域住民の誇りであり、文化遺産として残したいという気運が高まり、平成24年、河川改修で壊される運命から保存へとつながりました。



1900年代半ばまで生活道として利用された堤頂部。アーチ構造が確認できる。



下流側から見る金名の郷頭  
本体の強度を増すために、上流から下流まで栗石を敷き固めた上に、直径30～60cmの平石を敷いて川床としている。



向田第1号古墳  
金名の郷頭の堤中央部のトンネル部分は、地区内に残る古墳時代の横穴式石室と同じ石組みで築かれている。



金名の郷頭導水部(下流側)